

# 「村葬」に見る総力戦

井上佳子

Total War seen in “village burial”

Keiko INOUE

851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

長崎県立大学 国際社会学部 国際社会学科

Department of Global and Media Studies, University of Nagasaki,

1-1-1, Manabino, Nagayo-cho, Nishisonogi-gun, Nagasaki Prefecture 851-2195, Japan; inoue28@sun.ac.jp

---

日中戦争や太平洋戦争下、戦死者が出ると、郷土の村では「村葬」が行われた。集落の小学校などで行われた村葬には、在郷軍人会や国防婦人会をはじめ、地域の子供たちなども多く参列した。

「村」という共同体によって、「公共」の場で行われた村葬は、総力戦にどのような影響をもたらしたのか。日中戦争で戦死した著者の祖父、井上富廣の村葬などをもとに考察する。

---

**キーワード：** 戦争、農村、村葬

## はじめに

日中戦争や太平洋戦争下では、戦死者が出ると、村々で「村葬」が営まれた。集落の小学校などで営まれる場合が多く、在郷軍人会や国防婦人会、議会、そして地域の人たち、小学校の児童などが参列し、大がかりなものとなった。学校教育も、メディアも、戦死者を「誉れ」とたたえる中、遺族は悲しむことすら許されなかった。

著者の祖父、井上富廣は、1937（昭和12）年8月、第六師団歩兵第十三連隊の衛生兵として応召され、翌1938（昭和13）年7月、中国安徽省大湖付近の戦闘で戦死している。著者は、2017年、富廣が残した日記や手紙をもとに、ドキュメンタリー番組「民教協スペシャル・祖父の日記～時を超え家族に伝える戦争の真実」を制作した。その際、富廣の村葬に参列した人たちを取材している。

当時小学生だった岡田健士氏（取材当時85歳）は、78年前の村葬の記憶が鮮明だった。戦死した富廣のように、将来自分も戦地で勇敢に戦うとその時心に決めたと言っていた。死ぬことは怖くなかったとも語った。矢野敬一は『慰霊・追悼・顕彰の近代』の中で「公葬自体がはらむスペクタクル性、またそこに動員された人々によって儀礼行為が共有されることによって生じる政治性を通して、戦死者の死が郷土の名誉として受け止められ、さらにナショナルな共同性へと

回収されていく」と述べている。

「村葬」は、総力戦にどう関わったのか。富廣の村葬の形態や、参列した人たちの談話をもとに考察する。

## 1. 井上富廣の村葬

### 1.1 井上富廣について

著者の祖父、井上富廣は、1911（明治44）年、熊本市郊外の藤富村（現在の熊本市南区）の小作農家の長男として生まれた。耕作していたのは6反で、主に米、麦の二毛作である。1937（昭和12）年8月、第六師団歩兵第十三連隊の衛生兵として応召され、翌1938（昭和13）年7月、中国安徽省大湖付近の戦闘で頭部に銃撃を受けて戦死している。26歳だった。

著者の手元には、1930（昭和5）年、32（昭和7）年、33（昭和8）年、34（昭和9）年の日記、そして、応召後に家族にあてた手紙やはがきが現存している。応召前の日記には、大地を耕す喜びや、恋愛、結婚の幸福が綴られ、戦時下とはいえ、当たり前前の日常があったことが伺える。

日記や、家族にあてた手紙を読むと、富廣が「国のために働きたい」という強い思いを持っていたことがわかる。当時は教育も、ラジオや新聞、ニュース映画などのメディアも、こぞって軍国主義を叫んでいた。

富廣の日記や手紙の中で、その思いを伺える部分を、一部

だがここに抜粋しておく。今回、村葬というメディアが、総力戦にどのような影響を及ぼしたかを考えるにあたり、当の兵士たちは、そのような状況をどう受け止めていたかを考えることも必要だと考えるからだ。

1932（昭和7）年、富廣は22歳。青年訓練所に通っている。村から、続々と男子が召集されていく。

「山田初喜 台湾キイルン銃砲隊付きとして出営す。川尻駅発十時四分。我が学窓の友、山田君。今日晴れて皇国の干城として懐かしの郷を立つのだ。在留青訓生一同、見送りせんと九時の規定にはせつけてみれば、気の早い下権藤の人たち早や去りし後ならん。我、訓練旗を奉持して川尻へ急いだ。不肖なる私の肩辺に翩翩として翻る。我らの和す万歳三唱。山田君の雄姿、汽車とともにかすかになった。おお故国のために大いにやれよ。1932（昭和7）年1月9日の日記」

「今日は我がもっとも信頼する、青訓第一の人格者田代君、晴れて十三連隊に入営だ。天晴と言え、未だ暗い大道を今日も旗手としての栄冠をかざして先生とともに四つ角まで行った。早や田代君はそこに我らを待っていた。送る辞送られる辞そこに一抹の風雲はあったか。国家の干城としての首途。おお友おおいにやれよ。家のため、引いて訓練所の名のため。今こそ首途だ。大いにやれよ。1932（昭和7）年1月10日の日記」

この年の1月、第一次上海事変が起こっている。

「朗らかな朝まだき、戦地の渋谷君より手紙がきた。有難い、おお懐かしの友よ健やかであってくれ。早速返信を書いた。上海事件は満州問題とはちとわけが違うのだとの話。生命安全期しがたしとある。おお軍国の生命線を守る人よ感謝する。1932（昭和7）年2月12日の日記」

「上海事件如何なりやと氣遣って床屋に遊びに行った。御国のためとはいえ、異郷に奮闘しておられる兵貴たちがご苦勞である。おお我が友、渋谷君。果たして安息であってくれ。我は故郷平地よりそればかり祈っているぞ。1937（昭和7）年2月2日の日記」

「安己橋上を通過する軍人の騎馬姿を見る。いつもながら威厳はあるが忙しいまなざし。号外は出る。我が機、敵機を十三台撃破したと聞いて我ながら心が勇む。1937（昭和7）年2月26日の日記」

「吹く風も和やかに恍惚として夢のような平和な郷の眺め。満州問題も一時停滞しおだやかに満州新国家は樹立せられた。甘粕大尉、その警備局長就任ときく。おお嬉しきことよ。1937（昭和7）年4月2日の日記」

この年、日本による満州国建国を認めるか否かをめぐり、国連臨時総会が開催されている。外交官、松岡洋右は建国を認めないとする国際社会に背を向け帰国している。その翌日の富廣の日記である。

「国際連盟総会四十二対一。我が松岡主席全権は『花は桜木人は武士。日本人の最後は潔いもので』との意気ある言葉を

後に一路故国に帰る。是の際、如何なる国際間が問題と成っても、飽く迄日本と満州は提携して世界各国を相手に。なんの経済の小ささ、恐るに足らずだ。1933（昭和8）年2月25日の日記」

残された軍隊手帳によると、富廣は1937（昭和12）年8月に、衛生兵として熊本陸軍病院に召されている。ここから、妻ツギエに向け、手紙を書いている。

「外出ができれば帰郷するよ。もう立派に残留と決定した事だからね。兵站病院付として出征する看護兵が病院へ準備のため来るがうらやましくてね。実際出征したくて仕様はない。うづく心をおさえて勤務しているわけだ。故郷の同じく立った人たちも皆出征と聞けば実際やりきれぬ。然し何事も運命だ。何も彼もあきらめが第一だ。1937（昭和12）年8月31日」

「今度野戦に出動する人員は今日確定しました。不幸にも僕はその内に入りませんでした。僕より年下の若い連中ばかりですよ。明日が軍装検査でここ数日中に出征する模様。1938（昭和13）年5月17日」

手紙の文面からは、早く戦地に行かなければと焦る気持ちが伝わってくる。それには、当時の教育、メディアのありよう、村の同調圧力など、さまざまな要因があるが、富廣の心情は、当時の青年に共通したものと言えるだろう。

## 1.2 井上富廣の村葬

著者の実家には、富廣の日記とともに、軍隊手帳や戦死広報、戦死を伝える新聞記事なども現存している。富廣は1938（昭和13）年7月27日に戦死しているが、戦死広報は9月22日付けとなっているので、2か月近くたってから届けられたことになる。

そして9月30日付けで、歩兵第十三連隊から通夜の通知が来ている。10月1日午後3時50分、熊本駅で遺骨の凱旋。そのあと10月1日、2日の夜に将校集会所で通夜、3日午前9時半から第十三連隊営庭で師団告別式があり、正午ごろ、遺骨を引き渡すとされている。

九州日日新聞には、10月3日に豪雨の中で富廣の所属した中野部隊と飯野部隊の合同慰霊祭が行われたことが報じられている。「英霊を祀られた殊勲の人々」との見出しで中野部隊の戦死者70人の名が掲載されている。この中に富廣の名もある。

熊本博物館所蔵の「井上辰馬関係資料」によると、富廣が暮らす藤富村では、1937（昭和12）年から1940（昭和15）年まで、7人の戦死者について、6回村葬が行われたことが記録されている。合同で開催されたケースもある。村葬費用についての追加予算の提案書、具体的な村葬の計画書、式次第などが残っている。

資料によると、井上富廣は藤富村で二番目の村葬である。合同ではなく単独で行われている。井上富廣の村葬に関する文書を詳しく見てみる。

まず、飽託郡藤富村村長の橋本鶴彦の名で昭和13年9月8日付で提出されている「昭和十三年度熊本県飽託郡藤富村歳入歳出追加更正予算（第一回）」によると、歳出で、支那事变費として、追加更正予算200円が計上されている。内訳は、井上富廣村葬費が100円、弔慰金が50円、慰藉料50円である。弔慰金は出征軍人が死亡した際、父母や妻子に支払われるもので、一人10円である。この時は5人分となっている。井上富廣の場合、母、妻、長男の三人で、30円は不足なので、20円は、他の戦没者関連と思われる。そして、慰藉料の50円は、「傷病軍人慰藉料一人五円十人分」となっている。

続いて昭和13年9月8日提出の「村税免除に関する件」と記された文書には、昭和13年度の納税免除者12人が記されている。この年の7月に戦死した井上富廣も2770円の納税を免除すると記載されている。

「故井上伍長葬列順序（自宅出棺から葬儀場まで）」との文書によると、井上富廣の村葬は、1938（昭和13）年10月6日に行われている。10月3日の遺骨の引き渡しから三日後である。

午後1時15分に自宅出棺。葬列は、青年学校生徒による弔旗、花輪、供物、写真、遺族、霊柩、在郷軍人、後援団幹部、会富区消防組、会富区国防婦人会の順で、午後2時40分に斎場である藤富小学校到着となっている。葬儀終了後、再び埋葬墓地までの葬列が行われている。

「故陸軍衛生伍長井上富廣氏村葬次第」との文書では、村葬の次第が記されている。

それによると、村田助役の開式、読経のあと、弔辞が続く。弔辞は、藤富村長、師団長、熊本県知事、歩兵十三連隊長、朕隊区司令官、熊本憲兵隊長、飽託郡連合分会長、藤富村分会長、藤富村老兵会長、軍人後援会熊本県支部長、赤十字社熊本県支部長、愛国婦人会熊本県支部長、国防婦人会熊本県支部長、国防協会熊本県支部長、消防協会熊本県支部長、熊本県町村長会長、飽託郡町村長会長、飽託郡時局後援会長、飽託郡教育会長、飽託郡神職会長、川尻警察署長、南部町村長会長、南部教育会長、熊電川尻営業所長、川尻郵便局長、藤富村会議員代表、藤富村青年学校・小学校長、藤富村消防組頭、その他の順となっている。

このあと、弔電披露、読経、焼香、葬儀委員長挨拶、遺族挨拶、村田助役の閉式となっている。

焼香の順番も記されている。藤富村長、喪主、遺族、親族、師団長、県知事、朕隊長、朕隊区司令官、憲兵隊長、郷軍連合分会長、藤富村分会長、藤富村老兵会長、軍人後援会県支

部長、赤十字社県支部長、愛国婦人会県支部長、国防協会県支部長、国防協会県支部長、消防協会長県支部長、県町村長会長、郡町村長会長、郡時局後援会長、郡教育会長、郡神職会長、川尻警察署長、南部町村長会長、南部教育会長、熊電川尻営業所長、川尻郵便局長、藤富村会議員代表、藤富村小学校長、児童総代、藤富村消防組頭、青年学校男女生徒代表、青年団代表、女子青年団代表、愛国婦人会代表、国防婦人会代表、一般焼香と続いている。

「故陸軍衛生伍長井上富廣村葬斎場各団体及参列者区画明細図」は、斎場の見取り図である。

霊柩の左右に花輪、正面に焼香台が置かれ、その手前が僧侶席である。霊柩の向かって右側が遺族、葬儀委員、村有志、左側が軍部・県官、団体代表・町村長・学校長、その他の代表者である。

そして手前には、向かって右から左に向かって、一般参列者、国防婦人会、愛国婦人会、消防組・青年団、老兵会、在郷軍人会、青年学校生徒、他村軍人会、他村青年学校、小学校生徒、他村小学校生徒、女子青年団・青年学校生徒が並んでいる。

村葬は、村だけでなく、郡や県など、広域にまたがり、軍、行政、民間企業など、多くの組織からの参列があったことがわかる。「公」の色彩が極めて濃く、「戦死」が「社会的な使命の遂行」という意味を持ち、「公葬」が、その「顕彰」という役割を担っていることがわかる。

富廣は、昭和15年10月に靖国神社に合祀されている。陸軍大将畑俊六の名で、10月15日に招魂式を行うとの遺族宛の通知文が残っている。

昭和15年10月16日の九州新聞は「参道から拝殿まで埋む参拝者の波」との見出しで、大勢の遺族が参列したことを伝えている。

## 2. 村葬というメディア

### 2.1 地域の中の村葬

村葬は、地域にどんな影響を及ぼしたのか。先に見たように、「公」的色彩の濃い村葬は、戦死者の顕彰を通し、地域の人々に、戦時下、国民としての規範を示し、同調を求めることで、総力戦に大いに貢献したとすることができるだろう。

前述したように、著者は、2017年放送のドキュメンタリー番組の取材で、富廣が暮らしていた熊本市会富町で、戦時下を知る人たちにインタビューをしている。

藤富村の隣の集落に住む西山茂己さん（取材当時90）は、兄二人が戦死している。長兄は、富廣と同じく1938（昭和

13) 年に戦死している。西山さんはその村葬を記憶している。この集落でも、村葬は地元の小学校で営まれた。

「村葬は大したものだった」西山さんは当時を振り返りながらそう語った。「村の兵隊は皆、参列しました。記念品に落雁があったのを覚えています。集落の入り口まで皆、整列して迎えてくれた。何百人と来ました。子どもも参列して、村長も挨拶して、立派なものだった」。

西山さんの両親は「戦死は大したもの、ありがたい」と喜んだそうだ。靖国参拝への案内状が来て、両親が参列し、東京見物もしたという。

西山さんの家では、兄が戦死したとき、「遺族の家」として日の丸が高く掲げられた。二人目の兄が戦死して旗は二本になった。終戦前には、集落のあちこちに日の丸が高く掲げられていたという。「商いに来た人なんか、日の丸を拝んでいたですよ。悪い気はしなかったです」。

富廣の長男で、著者の父、剛も、同様の記憶を持っている。戦線が太平洋に拡大していく頃、真新しい富廣の墓の近くを十三連隊の兵士たちが通りかかったことがあるという。そのときのことが、幼い剛の脳裏に鮮烈に残っている。「陸軍の星を見てね、兵隊さんたちが一列になって敬礼したよ」。

一方、召集される兵士自身は、戦時下、どのような気持ちで戦地に赴いたのだろうか。

元兵士、熊本市の法喜孝丸さん（取材当時 90）は、敵陣に自ら突っ込んだ経験があるという。

「どういう思いで突撃するかと言えば、ここでもし自分が卑怯なことをすれば、故郷の家族が村八分になると、それだけを考えて突っ込んだんです」。そしてこう続けた。「戦争は家族のためですよ」。

卑怯なことをしたり捕虜になったりしたら、ふるさとの人たちが家族に顔向けができない。そんな思いで兵士たちは戦い続け、捕虜になるより死を選んだ。

富廣と同じ衛生兵だった金澤真繁さん（取材当時 100）も、村葬の持つ同調圧力を思い知らされるエピソードを語った。

応召されていた熊本陸軍病院から一時帰省したとき、集落では、同級生の村葬が行われていたという。母親は、顔を見せた息子に対し、「おまえも早く戦地に行け」と怒鳴ったという。戦地に行かず、熊本にとどまる我が子に「肩身が狭い」思いをしたのだろうか。

富廣の村葬を記憶する末永武喜さんによると、日本の敗色が濃くなるにつれ、村葬を行うゆとりはなくなっていった。

終戦間際には、村の青年たちは、悲壮な表情で戦地に向かったという。末永さんの兄は、終戦間際、旧満州で亡くなっている。二十歳だった。石が一個入った骨箱が返ってきて、自宅で葬式をしたという。

## 2.2 次世代への影響

村葬には、小学生も多く参列した。子供にどんな影響を及ぼしたのかという点を忘れてはならないだろう。

岡田健士さん（取材時 85）は小学校一年生のときに富廣の村葬に参列した。とにかく盛大だったと、岡田さんは語った。「先生も授業で話すし、親も富廣さんのことを話しました。「国のために命を投げ出して立派に戦ったと。だから私も、富廣さんの名前は記憶にしっかりこびりついています。私たちもいつかはあとに続くぞという気持ちでいました」。参列した小学生は、それぞれに花を調達し、祭壇に飾ったそうだ。

「戦争が恐ろしいと思わなかったですよ。きょうは家が燃えないかと本気で思っていました。どうせ燃えるのなら早く片付いた方がいいと思っていました。どうせ死ぬんだから、死ぬなら国のために死ぬぞと思っていました」。

岡田さんはその後少年航空兵に志願しようとしたが、志願できる規定の出生年月日にひと月足りなかった。岡田さんは母親に、もっと早く産まなかったことを本気で抗議したそうだ。

岡田さんによると、遺族となった妻ツギエや三歳の長男、剛、母エトには、村の人たちから「名誉なことでした、名誉なことでした」との言葉が繰り返しかけられたという。「遺族は、悲しくても、悲しめない。死ぬのは名誉なんだから。どんなにか辛かったことだろうと思いますよね」。

末永武喜さん（取材当時 85）も小学校の一年生のとき、この村葬に参列した。末永さんは当時の記憶を紙に書いて説明してくれた。それによると、川尻方面から、遺骨をのせた車が到着し、遺骨を抱いた妻ツギエと幼い長男、剛が式場の小学校までの道を歩いたそうだ。道沿いには子供たちや大人が並び、遺骨を出迎えた。「私たちのために命をかけて戦った人が帰ってくるんだから、ありがたい、ありがたいと、皆でお迎えしたのを覚えています」。

そして末永氏は、ひとつ忘れられない出来事があると言った。「葬儀が終わったとき、司会の人が、本村村葬も滞りなく済み、と最後に言ったのを覚えています。『ほんそんなら何だろう』って子供心に思いました」。先に記した「故陸軍衛生伍長井上富廣氏村葬次第」によると、閉式を宣言したのは藤富村の村田助役である。

## 2.3 イベントとしての公葬

井上富廣の日記によると、毎年四月に開催される戦死者の慰霊祭「招魂祭」は多くの人で賑わい、さまざまな催しが行われるなど、イベントと化している様子が伺える。

「招魂祭」は護国神社の前身である招魂社が毎年行っていて、熊本城内で開催されていた。招魂祭は、西南戦争、日清・日露戦争など明治以降の戦死者に加え、その年の戦死者が新たに祀られた。サーカスや奉納競馬、奉納相撲なども開催され、大勢の人で賑わい、人々は、夜は街に繰り出し繁華街

は不夜城と化した。「不景気はどこを吹くとばかり、どんちゃんぐあんちゃんの騒ぎ」(九州新聞 昭和5年5月2日)  
富廣も日記に招魂祭に出かけたことを記している。

「きょうは藤崎台において盛大な招魂祭が施行される。朝からどんよりと曇り降り出したる雨のために、せっかくの祭りも少し出鼻を折られた様子。雨の中に盛大な神式祭典は挙行せられた。雨もやみあらゆる催しも大分賑いの様。1930(昭和5)年4月30日の日記」。

「今日は招魂祭第二日目で、仏式によって盛大な祭りが行われるのである。今日もまたうるさい雨は降るともなしに降ってきたが、見物人はきのうより余程増したようである。人間の極致の妙技に我が目を疑った空中サーカスも招魂祭なればこそなり。1930(昭和5)年5月1日の日記」。

1934(昭和9)年の日記にも、招魂祭の記述がある。

「常には空きの井手バスも満員超過で鈴なりだ。これはとても乗り切れないと断念して熊本まで歩いた。宮に参拝して忠勇なる兵士の霊を慰め色々の余興を見る。午後は競馬など見物して夕方人の波にもまれて繁華街へと進出。1934(昭和9)年4月30日の日記」。

昭和9年5月1日の九州新聞には「満州事変出動から凱旋第一年目の熊本招魂祭」との見出しでこう書かれている。「三十日、連日の降雨も朝まだき祭典場藤崎台招魂社には大小数十旗の五色の旗中天高く薫風に翻り」「午後に入って人出は一人と増し軽やかな春の装いをこらした老若男女の群れが街から街へペープメントを泳いでいった。満員電車が通り過ぎれば自転車が慌ただしく走っていく。車の洪水と人の流れで街は沸きかえった。みずぬるむ水前寺なども泳ぎ疲れた人、人、人の黒山だ。アイスクリーム屋さんが真っ赤になりながら一銭一銭と売声をあげているかと思うと片方ではアイスキャンデーがとんでいく」。

相撲やサーカス、競馬などが「奉納」の名のもと、慰霊祭の傍らで開催されている。少々意外な気もする。この時期は「戦死」が身近なものだからだろうか。

## 2.4 村葬と新聞

市町村で行われる「村葬」の情報は、新聞で逐一取り上げられた。誰が戦死したのか。戦死者の最期はどのようなものだったのか。遺族はどのように語っているのか。彼らに対し、町や村はどのように弔い、称えているのか。戦線が拡大し戦死者が増えるに伴い、それらは読者の最大の関心事だったに違いない。また、市町村に対しても、「公葬」の遂行を促す役割を果たしたことが容易に想像できる。

先にも述べたが、井上富廣が戦死したのは1938(昭和13)年の7月27日である。ここでは、熊本で発行されていた九州新聞、九州日日新聞の昭和13年9月、10月の記事を概観し、考察する。

この年は、前年に始まった日中戦争で、戦死者が急拡大する時期である。両新聞ともに、シリーズを組んで戦死者を紹介している。

昭和13年8月28日の九州新聞では、「燦たり！栄光輝く」というシリーズで、戦死者の顔写真と、戦死の経緯、遺族のコメントを掲載している。ひとりひとりに「倅も地下でさぞかし感泣」「この光栄拝しただ感激の極み」「この上もなき家門の名誉」など、遺族のコメントをもとに小さい見出しがつけられている。

こういったシリーズは、いくつか散見される。九州日日新聞は「名誉の戦死傷者」「噫！護国の華」遺族を訪うて勲功讃ふ」「尊き護国の人柱 武勲輝く郷土の勇士」、九州新聞では「護国の英霊故山に鎮る」「武勲輝く人々」「殉柱護国の華」などがある。記者が遺族宅を訪れ、遺族に直接、話を聞くスタイルが多い。

井上富廣の戦死の記事は、九州日日新聞、九州新聞両方で見つけることができた。九州日日新聞での掲載は昭和13(1938)年9月22日付けである。富廣の戦死広報の日付は昭和13(1938)年9月22日付けであるから、この三日後に掲載されたことになる。シリーズ名は「尊き護国の人柱 武勲輝く郷土の勇士」。戦死した27人の死を称えておりその中に富廣の記事もある。「氏は勤勉実直。会富村の青年支部長、同村郷軍分会の評議員を務めていた。家には母エトさん、妻女ツギエさん、長男剛くんがあり、母エトさんがツギエさんとともに語る。親の口から申すようですが非常に近所のほめられ者でした」と記されている。

九州新聞は、昭和13年9月30日付けである。シリーズ名は「名誉の戦死者」である。

「飽託郡藤富村出身衛生兵伍長井上富廣君は八月二十七日太湖北方の戦闘にて名誉の戦死を遂げたる旨原隊より電報にて通知があった。実家は農家で母エト(65)妻ツギエ(27)長男剛(4つ)さんが居住。富廣君は出征時、村の青年団支部長や郷軍分会の評議員などの幹部を務め至極真面目な精進家であった。母エト妻ツギエさんは左の如く交々語る。富廣は出征の際、国家のため一生懸命に働くから宅の事は宜しく頼むと言ふて行きました。私共は戦死は覚悟して居ましたので御國の為にさへなれば一家の名誉であります。隊長から戦場で負傷者等を勇敢に駆け回って手当中銃弾にあたって壮烈な戦死を遂げたとの通知があり軍人の本望でありましょう。せめて漢口陥落まで惜しかったのであります」。

九州新聞では、8月27日戦死と伝えているがこれは7月27日の誤りである。

矢野敬一は『慰霊・追悼・顕彰の近代』の中でこう述べている。

「各市町村さらに国家による慰霊と顕彰の前に、まず遺族

自身によって戦死が『名誉』あるものとして受け止められ、追悼されていることを示す必要があった。そうした追悼の語りやの流布を保障するのが、新聞記者による訪問である。それによって読者は間接的にはあれ遺族に向き合うことが可能となり、戦死者をめぐる感情の共同体に参加できるようになるのだ」

「新聞による遺族の訪問記事は戦死者をめぐる感情の共同体の形成に関わるだけではなく、同時に戦死者遺族の家族としてのあり方にも、一定の方向に規範化を図ろうとするものだったことを見落としてはなるまい」

戦死遺家族を取り上げたシリーズもある。九州新聞は「軍国の妻」というシリーズで、昭和13年9月12日、「自分が死んでも戦地の倅に知らずな その戦功を祈りつつあの世へ」という見出しで、甲斐上等兵の母、馬見原町のきくのさんを紹介している。

また、10月19日の「軍国の妻」では、「留守宅を守りながら腕と心の錬磨 団体奉仕も辞退して不眠不休精進を貫く」との見出しで、本渡市出身 山下上等兵の妻キクノさんを紹介している。

九州新聞には、「誉の一家」というシリーズもある。昭和13年10月19日は、「戦線の苦闘思えばまだ働き足らぬ 三人出征しながらも村からの銃後労働奉仕を辞退」という見出しで、阿蘇、柏村の小屋迫氏の一家が紹介されている。

また、「銃後赤誠美談」というシリーズでは、学童勤労献金や、勤労奉仕団の発会式が行われたことを伝えている。

シリーズ以外にも、遺族の模範的なあり方を規定するような記事がある。「願うことなら戦地で戦死を しづ子夫人健気に語る（九州新聞 昭和13年9月18日）」との記事や、「軍国の父の便り 前線将兵を泣かす 一粒種を戦死させた老父が切々綴る感激の一文（九州新聞 昭和13年9月18日）」、「一家三人出征して三人共名誉の戦死 小国町 渡邊丈太郎氏一家（九州新聞 昭和13年10月26日）」、「嬉しいやら勿体ないやら 誉れ輝く殊勲の有働一等兵 遺族喜びを語る（九州新聞 昭和13年10月23日）」、「一家四人軍籍居村の誇り 三男は名誉の戦死 田迎村 高本三郎氏一家（九州新聞 昭和13年9月21日）」、「日本一の果報者！ これぞ軍国婆さん孫部隊長 十六人の孫を戦場に送る 一人は天晴名誉の戦死（九州新聞 昭和13年9月19日）」、「輝く一家兄弟三人軍人 長男は名誉の負傷 岳間村 深牧恵吉氏一家（九州新聞 昭和13年9月4日）」などである。

矢野は『慰霊・追悼・顕彰の近代』の中でこうも述べている。「戦争という事態に対応すべく規範となる家族像が国民全般に示され、そこへ戦死者が回収される形で戦争をめぐる言説が構成されていく事態が総動員体制下、進行していた」

また次のような、兵士の戦地での戦いぶりについての記事も、「兵士のあるべき姿」を読者に強く印象づけることになったと言えるだろう。

「天皇陛下万歳と絶叫しつつ斃る 鬼神も泣く上野上等兵の最期 郷土の誇りと府本村民感激の的（九州新聞 昭和13年9月5日）」「後をよろしく頼むと莞爾として絶命 茶村部隊長の最期（九州新聞 昭和13年10月5日）」「腹部を撃ち抜かれながら莞爾として最後の万歳 花と散った廣部中佐（九州日日新聞 昭和13年10月7日）」「ああ戦死の刹那 赤土に残す「萬」の一字（九州日日新聞 昭和13年8月24日）」「刀を杖に仁王立ち 敵陣を睨んで立ち往生 国境第一線を死守 護国の花と散る 鬼神も哭く感激美談の数々（九州新聞 昭和13年8月15日）」。

そして、戦死者が出ると、各市町村単位で公葬が営まれた。両新聞には、逐一、公葬実施の情報が掲載されている。

九州新聞、昭和13年10月1日には「岳間村葬、小学校で盛葬」との見出しがある。このほか下矢部村葬が開催されたことも伝えている。10月16日には、「須恵村三英霊合同村葬」との記載がある。川尻町合同村葬、植柳町の合同村葬、白旗村葬開催の記事もあり、この日は合わせて12の町村の公葬開催を伝えている。10月25日には六郷村葬、隈庄合同村葬、来民合同村葬が営まれている。10月19日の九州新聞には、牛深合同町葬、御所浦村合同村葬、一町田村葬、中田村葬、本村葬、河原町合同村葬、中富村合同村葬、千田村葬、瀬尾村葬、白糸村葬、文政合同村葬の記載がある。

矢野は『慰霊・追悼。顕彰の近代』の中で公葬についてこう述べている。

「公葬や慰霊祭の報道を通して戦死者に対する行動規範を読者に提示するだけではなく、戦死者の追悼と顕彰をめぐる感情の共同体を構成するうえでも新聞は大きく関与していたのである」

「公葬に関して国家や軍が積極的に関与していたわけではない。各市町村に相当の部分が委ねられていたのが実情だ。だが公葬自体がはらむスペクタクル性、またそこに動員された人々によって儀礼行為が共有されることによって生じる政治性を通して、戦死者の死が郷土の名誉として受け止められ、さらにナショナルな共同性へと回収されていく。そうした役割を公葬が担っていたという点は、どの市町村の場合であれ共通していた」。

以上見てきたように、戦死者の村葬は、戦死に改めて「公的」な意味付けをし、地域社会に、遺族のあり方などの規範を示す役割を担った。更に、戦死者の遺家族を記者が訪問し、遺家族の談話を新聞が伝えることで、読者は戦死者や遺家族に身近に感情移入することになり、「地域の名誉」として戦死を受け入れることになっていったと思われる。

しかしそのことは、一方で「同調圧力」を生み、出征する兵士に、戦地で勇ましく戦うこと、恥ずかしくない死に方をすることを強いることにもなった。富廣は、妻に宛てた手紙の中で、村の他の青年と比較し、早く戦地に行かなくてはと焦る気持ちを吐露しているし、番組取材でインタビューにこたえてくれた法喜孝丸さんは、敵陣に突っ込んでいった経験を「家族が後ろ指をさされないためだった」と語った。

また、元衛生兵の金沢貞繁さんは、同級生の村葬をきっかけに、母親が自分に「早く戦地に行け」と怒鳴った体験を語った。

新聞で逐一報道される町や村の公葬の情報は、各自治体に対し、遅滞ない遂行を強く促したであろうし、戦場に夫や息子を送る住民も、それを期待したに違いない。戦死という現実を受け入れる際、「名誉」がその支えになったに違いないからである。藤富村で営まれた富廣の村葬を記憶する末永武春さんが、式の最後の「ほんそんなそうもとどこおりなくすみ」との言葉が記憶に残っていると語っていたが、私はそこに、責務を果たし安堵した村の助役の心情を想像する。

公葬自体が、総力戦を遂行する国家の意思を伝える身近で強力なメディアであったと言えよう。

#### 参考文献・資料

1. 井上辰馬関係資料、熊本市立博物館蔵
2. 矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』、2006、吉川弘文館
3. 井上佳子『戦地巡歴・我が祖父の声を聴く』、2018、弦書房
4. 九州日日新聞、1930年～1945年
5. 九州新聞、1930年～1945年